

II 研究論文

国語教育における形象理論の生成

安 直 哉

1 三つの課題

本稿でいう「形象理論」とは、垣内松三によって提唱された文化理論を指す。形象理論は、後には多くの国語教育者の共有財産となり、発展していく。しかし、その初期においては、「垣内学説は形象理論であった」⁽¹⁾というように、垣内学説全体に近似した概念であった。

本研究は、垣内松三によって形づくられた形象理論の生成要素の源流を解明することを通して、その初期における根本思想の一面を探究することを目的とする。

垣内学説は1922年刊『国語の力』、1927年刊『国語教授の批判と内省』等で広く知られるようになる。そこで展開されている形象理論は種々の側面を持つが、読み方教育において特に重要なのは次の二点であった。

第一はセンテンスメソッドの提唱であり、第二は読みの過程における「直観・自証・証自証」の提唱である。本研究では、これら二つの方法論の源流をたどることによって、形象理論の生成的起源の一端を解明する。センテンスメソッドの淵源をたどり、それに伴う問題を指摘することを第一の課題とし、本稿第2章で扱う。次に、「直観・自証・証自証」の淵源をたどることを第二の課題とし、本稿第3章で扱う。

また、読み方教育をも包含した形象理論の基本理念の一つに、「統一」という概念がある。「統一」概念が内包する理念を探ることを第三の課題とし、本稿第4章で扱う。

2 センテンスメソッドの問題

1906年にアメリカで発行された書物にはすでに次のような記述が見られる。

センテンスメソッドは、子どもたちへの読み書き教育において、世界中の公立学校の指導者によって採用されている。⁽²⁾

ここでいう「世界中」というのは主に欧米諸国のことであろう。20世紀初頭にはすでにセンテンスメ

ソッドは、欧米諸国で実施されていたのがわかる。日本でセンテンスメソッドが広く認知される契機となったのは、垣内松三著『国語の力』の冒頭近くでセンテンスメソッドが提唱されたことによる。芦田恵之助の「冬景色」の実践の紹介を伴ったことも理解の促進となった。

2-1 Huey とセンテンスメソッド

センテンスメソッドについて垣内は次のように述べている。

ヒューイのセンテンスメソッド Sentence-method は、それより以前に行はれたる断片的なる文の部分的教授法に対して、有機的統一的方法を学理的实际的に研究したものであるが、私の考察の焦点も、文を読むと同時に直観する文の形即ち想の形を、国語教授の単元としなければならぬといふことである。⁽³⁾

このように、垣内は、センテンスメソッドの発想を、ヒューイ (Huey, E. W.) から得ていた。垣内は『国語の力』の冒頭近くで、「ヒューイの『読方の心理と教育』に記すところに依れば」⁽⁴⁾と記している。ここから、垣内は『国語の力』執筆以前に Huey 著『読み方の心理と教授』(The Psychology and Pedagogy of Reading) を読んでいたことがわかる。

『読み方の心理と教授』は1915年にニューヨークで出版された。同書ではセンテンスメソッドの使用に至る経緯について次のように書かれている。

1657年のコメニウスによる「世界図会 (“Orbis Pictus”）」から、ワードメソッドが始まった。⁽⁵⁾

この「ワードメソッドは極めて一般的で、現在(引用者注、Huey の同書が発行された1915年頃)でも全世界的に使用されている。しかし、普通は、発音的方法(フォニクメソッド)またはセンテンスメソッド、場合によってはその両者と結合させて使われるのである。」⁽⁶⁾とされている。ワードメソッドを補助する方法として、センテンスメソッドが使用されていたことがわかる。

センテンスメソッドには、「全体の意味が読み手

や話し手の意識に浮き出ている場合のみ、有効である。」⁽⁷⁾という限定が見られる。その上で、「重要な点は、意味全体・文全体から始まるということ」⁽⁸⁾であるという。

「この(センテンス)メソッドは、最初は、ワードメソッドと同様に、評価が高かった。そして、ワードメソッドで行うよりも、自ずと、より「滑らかな(“legato”)」読みを与えてくれた。」⁽⁹⁾というのである。

センテンスメソッドは Huey が独創したものではない。Huey の著書は、アメリカの当時のセンテンスメソッドの流行を紹介し、その有効性と限界を指摘するという役割を果たした。では、センテンスメソッドの実践を始めたのは誰なのであろうか。

2-2 Farnham とセンテンスメソッド

Huey は、センテンスメソッドの最初の実践者について次のように説明されている。

センテンスメソッド(sentence method)はコメニウスによって提唱されたものの、1870年頃、ニューヨークのビングハントン(Binghamton)の学校における、ファーナム(Farnham)の実験を通じて普及するまでは、アメリカにおいてはほとんど用いられなかった。(中略)ファーナムの小冊子『読み方のセンテンスメソッド』(*The Sentence Method of Reading*)は、今でもその方法(センテンスメソッド)の極めて公明な紹介をしてくれている。⁽¹⁰⁾

この文章からは、センテンスメソッドの最初の実践的な開発者は、ファーナム(Farnham, G. L.)であることがわかる。上記引用文では Farnham の著書名が『読み方のセンテンスメソッド』となっているが、これは同書表紙に印字された略書名である。正式書名は見開きに記されている『読み方・書き方・スペリング指導のセンテンスメソッド：教師のための手引き』(*The Sentence Method of Teaching Reading, Writing, and Spelling: a Manual for Teachers*)である。

Farnham は同書前半の「概括」として、自らの論を次のようにまとめている。

第一—ものごとは全体として(as wholes)認識される。
第二—全体を黙考すると同時に、部分は認識される。

第三—言語の全体(The whole)や単位(unit)は、文(sentence)である。

第四—文の部分としての語(Words)は、文を認識する間に発見される。

第五—文字(Letters)は、語を黙考する間に発見される。

第六—言語、とくに書記言語は、思考の表出の方に注意が向いている間に、間接的に学習される。⁽¹¹⁾

Farnham は、上記のように、(少なくとも筆者が読んだ第二版の発行年の)1887年の段階で、全体から始めるという読みの思想を説いているのである。そして、全体から部分へという読みの方向性も示されている。この主張は、『国語の力』が発行される35年前になされたものであった。

垣内松三は Farnham の同書を読んでいない。Huey の著作を通して間接的に知っただけである。垣内が Farnham の著書を読んでいないという事実は、垣内松三著「センテンス・メソッドの弊害(上)」という論文の中の記述⁽¹²⁾からわかる。しかし、世界の国語教育史という巨視的視点で論じた場合、1880年代にアメリカの一教師が提唱したセンテンスメソッドという読解論が、アメリカのみならず、数十年後の日本においても花開いたと言える。

2-3 文と文章の問題

今日のセンテンスメソッドに付与された意味に関して、塚田泰彦は次のように述べている。

センテンスメソッドの二つの視界とは、一つは言語の単位を基準にして「文字」や「語」でなく「文」の単位からのアプローチを重視する場合で、もう一つは読みの全体論を象徴する用語としてこれが使われる場合である。(中略)センテンスメソッドの解釈をめぐるこの二つの視界はしばしば混濁し、混乱した判断の原因となっている。⁽¹³⁾

センテンスメソッドは、一文単位の読みを基本としたものなのか、それとも文章全体を基本としたものなのか峻別されないままに、今日に来ているということである。

注意しなければならないのは、その淵源となっている Farnham の主張にも、偶然にはあれ、同様の曖昧性が認められるのである。注11の引用文の「第一」と「第二」において、全体から部分へという主

張がなされているのであるが、これは読みにおいてあるべき一般的姿勢を示したものである。その次の「第三」において、「言語の全体 (The whole) や単位 (unit) は、文 (sentence) である。」と述べており、一文単位を基本とする考え方も提示されている。文章全体から始めるとい主張と、基本単位を文におくという主張が共存しているのである。

垣内松三は、芦田恵之助の「冬景色」の授業を掲載したうえで、「この読方の全体に現はれて居る作用」⁽¹⁴⁾の第一として、「通読 (音読) —指導者の音読から生徒は文意を直観して居る。これが Sentence method の出発点である。」⁽¹⁵⁾と述べている。Farnham の主張の「第一」が、結果的にはそのまま取り入れられているのである。しかし Farnham の同書は日本では知られることはなかった。むしろ、その後のサクラ読本の影響が絶大で、一文単位を基本とするのが、センテンスメソッドだと解される傾向が生じた。それは結果的には Farnham の主張の「第三」の部分に対応していた。

Farnham の論の全体が日本に紹介されていたならば、日本におけるセンテンスメソッドのとらえられ方も、あるいは違っていたかもしれない。

こうした混乱現象をもたらした要因の一つとして、垣内松三が、「文」と「文章」との概念規定を曖昧に持っていたことがあげられる。このことは、いみじくも沖山光の著書の記述から明示されている。沖山は、垣内の文章を引用する際、文脈上、「文章」であるべきところを「文」と記されている場合、わざわざ「(※章)」という文字を挿入している。一例を示す。

体用相関の作用は、形象の機構と理解の機構とを示現するのであるが、文 (※章) を読むはたらき、文 (※章) を綴るといのはたらきから考えて、この両者の間には相互に相融通するところがある。体用相関の関係を分析して、文 (※章) の本質を示す言葉として、これを「形象」と名づけた。⁽¹⁶⁾

こうした垣内の「文」と「文章」の混用は、センテンスメソッドに対する誤解も生み出した。しかし、通史的に見るならば、文章全体の直観を第一に設定しようとした垣内学説と、一文単位の読みを第一に設定しようとした立場との、共生の歴史が存在したと解することができよう。それは、形象理論が、垣内の意図するところを越えて様々に展開していく、

そうした過程の一事例とも言えるのである。

3 「直観・自証・証自証」の問題

高森邦明は「形象理論に立つ読み方」として、「(一) 形象の直観 (中略) (二) 形象の自証 (中略) (三) 形象の証自証」⁽¹⁷⁾をあげている。このように、「直観・自証・証自証」は、形象理論における読みの過程として、学界に広く認知されている。しかし、それらの言葉の出典については、ほとんど知られていない。本章では、これらの出典を明らかにするとともに、それらの言葉の持つ本来の意味を明確にしていく。

3-1 「直観」の出典

多田サイは、夏期講習会で垣内松三から学んだことを次のように述懐している。

直観説のクローチェの書、

Intuition is expression

Expression is Intuition—Croce—

の言葉を黒板に書き、読み聞かせてくださった先生のお声のひびきは、50余年経過した現在でも、そのイメージを鮮やかに浮べることができる。⁽¹⁸⁾

一般的な辞書でも、intuition は、「直覚、直観 (的洞察) ; 直観力 ; 直観的知識 [事実]」⁽¹⁹⁾と訳されている。

また、垣内松三の講義を筆録した石井庄司のノートにも次のように書かれている。

伊太利の美学者クローチェ「直観は表現なり。」

【注】“Intuition is expression. Expression is intuition”. —Benedetto Croce⁽²⁰⁾

「直観」という言葉がイタリアの美学者 Croce から来ていることはほぼ間違いない。

Croce は次のように述べている。

すべて真実の直観なり表象なりは、つまり表現である。己れを表現の内に客観化しないものは直観でもなく、表象でもなく、ただ感覚であり、単なる自然的事実である。精神が直観するのは、ただ活動と、形成と、表現に於いてのみである。直観と表現とを区別するものは、決して再びこれを結合し得ないであろう。

直観的活動は、それが表現せられればせられるだけそれだけ認識が増して来る。⁽²¹⁾

表現を経ることで直観が確立することが謳われて

いる。形象理論が、その形成初期から、読み方の理論の枠を越えて、綴り方の理論としても適用されていったことには、こういう所以があったからであろう。

この「直観」という言葉は、当時の日本の学問の世界では、比較的広く用いられていたようである。そうした状況は西田幾太郎著1917年刊『自覚に於ける直観と反省』（岩波書店）などからもよく読み取れる。石井庄司によると、「垣内先生が西田講師の授業を受けられたかどうか、その辺のことはよく分からないが、しかし、『北辰会雑誌』の諸論文には目を通されたはずである。後年の講義にも、よく西田先生のことは話をされ、またよく引用されたものである。」⁽²²⁾という。垣内が西田哲学から影響を受けていた面も大きいと思われる。

「直観」という言葉の出典は直接的には Croce からであるが、間接的には西田幾太郎ほか当時の諸学界から広く吸収したものと云えよう。

3-2 「自証・証自証」の出典

この「自証・証自証」の出典は、上記の「直観」とはまったく異なる。

垣内松三は、1922年から翌年にかけて東京高等師範学校で「日本文学史」の講義を行った。受講生である石井庄司が同講義を筆録した。そのノートが公刊されている。その中に一箇所ではあるが、「自証分 証自証分」⁽²³⁾という言葉が出てくる。「天真独朗観」という概念世界を図解化した、その図解の中に描かれているのである。その出典について、石井ノートには「梶川玄道——『唯識論大綱』p.45」⁽²⁴⁾と書かれている。

この出典については、二つの誤りがある。著者名は正しくは梶川乾堂である。また、同図解の掲載ページは、45ページではなく54ページである。

『唯識論大綱』は1909年鴻盟社から発刊、同年再版、1912年増訂改版、1916年増訂四版、1918年増訂五版が発行されている。石井ノートの図解部分の出典については、『唯識論大綱』の初版も増訂版も同一であり、垣内が、初版を読んだか増訂版を読んだかは分からない。『唯識論大綱』執筆の目的は、「主として各宗学林の教科書及び自修書に充てんとする」⁽²⁵⁾というものであった。

「唯識」とは次のように説明される。

すべての存在の構成要素は、心の中に認識され

て初めて成立するとしたのが、「唯識」という思想です。唯識とは、「唯だ識、すなわち心だけしか存在しない。自分の周りに展開するさまざまな現象は、すべて根本的心、すなわち阿頼耶識から生じたもの、変化したものである」と主張する思想です。⁽²⁶⁾

西洋哲学で発達した唯物論とは対照的な思想であることがわかる。「唯識思想は、単に法相宗の教義としてでなく、広く仏教の基礎学問として学ばれてきた。」⁽²⁷⁾とされている。大乘仏教は中観派と瑜伽行派とに大きくは分かれるが、その瑜伽行派の理論が唯識思想である。本稿では、まず唯識思想における「自証分」「証自証分」の意味を確認していく。

「自証分」「証自証分」は、唯識思想の中の「四分説」という教理の中に位置づく。

四分とは、心のもつ認識作用を四つの側面に分けることです。『法相二卷鈔』には次のように書かれています。

「四分と申候は、相分・見分・自証分・証自証分なり。(以下略)」

わたしがお寺の本堂で、百人ほどの人々に話をしているとしましょう。まず、話し手のわたしから見て、わたしが見分であり、聴衆が相分です。言い換えますと、わたしがサブジェクトで、聴衆がオブジェクトです。(中略)「自証分」とは、確認ということです。すると、「証自証分」は確認の証明ということになります。⁽²⁸⁾

上は譬えを用いた説明であるが、別の書物には次のようにも書かれている。

唯識仏教では、認識するという心の作用が起こるときは、心それ自体が、そのはたらきにおいて四つの領域に分かれる——そして、それによって、いわゆる認識作用というものが成立するのだ、と考えたのです。つまり、みられるもの（相分）とみるもの（見分）、そして、そのみることを確認するもの（自証分）とその確認をさらに認知するもの（証自証分）とに分かれるのである、と説くのです。⁽²⁹⁾

ここから第一に分かることとして、「自証分」「証自証分」は、認識のあり方の「作用」を示す概念であることがあげられる。

次の引用文からは、第二の観点が読み取れる。

主観（見分）の働きを確認する作用として自証分をたてるのである。

さらに、以上の論理からすれば、自証分の奥にこの自証分の働きを確証するもう一つの確証作用が存在することになる。したがってそれを〈証自証分〉(自証を証する分)と名づける。⁽³⁰⁾

読みの過程に置き換えて考える。最初の主観的読みに「確証」を与える役割として、「自証分」「証自証分」という過程が措定されているということが分かる。

つまり、当初の主観的読みに確証を与える作用として、「自証分」「証自証分」という概念が導入されたのである。こういう仮説のもとで、『唯識論大綱』を読み解いていくこととする。

『唯識論大綱』初版には次のように書かれている。

諸識の作用を四種に分つ。一に相分。相とは相状の意、色心の諸法相状差別して、心 心所の所縁、即ち認識の客体となる。この心の所縁たる用を相分と名く。二に見分。見とは見照の意、心が自己の性質としてよく前境を見照す、この心の能縁の用、即ち認識作用を見分と名く。三に自証分。自とは見分を指す、見分の外縁作用を、認証する作用を自証分と称す。四に証自証分。自証とは前の自証分を指す、自証分を更に認証する作用を証自証分と名く。第七図に示すが如し。

第七図

相分——所縁の用

見分——能縁の用

自証分——見分を縁する用

証自証分——自証分を縁する用⁽³¹⁾

この引用部分に関しては、初版の文章も増訂版の文章も同一である。

「自証分」は、「見分」の縁を認証する作用となる。「相分」がオブジェクト(客体・客観)であるのに対して、「見分」はサブジェクト(主体・主観)である。自証分はサブジェクトを認証する作用であり、証自証分は、それをさらに認証する作用となる。これを読みの作用のレベルで考える。そうすると、サブジェクトであるところの読者の主体的読みを出発点として、それに関する認証を深めていく過程が、自証分・証自証分であることがわかる。

形象理論はオブジェクトである教材の側に重点が置かれている理論であるという批判がある。しかし、形象理論の一淵源を考察すると、このように、読者

の主体的読みを出発点とした観点から成り立っていたことが分かってくる。

ところで、唯識思想に由来する「自証分・証自証分」という言葉が、垣内の中で「自証・証自証」という言葉へと変化したのは、いつ頃からであろうか。国語教育において「直観・自証・証自証」の提唱が一般に広まるのは昭和初期であるというのが通説である。しかし、それ以前の1926(大正15)年10月23日に垣内は、次のような文章を発表している。

西欧の言語・文学の研究の心に、東方の Logolatry が反響した感触の鋭敏と我々の祖先の体験が数世紀の長きに亘って黙殺されていた研究心の遅鈍とも見うけられる二つの対立の間から、泉の中に動いている沙のように自証、更にそれを追い越す証自証の精神が清められて来ることを覚えるのである。⁽³²⁾

このように、垣内は、大正末期からすでに「自証・証自証」という言葉を用いていた。この引用文からは、Croceの美学における「直観」に代表される西洋思想と、大乘仏教瑜伽行派に代表される東洋思想との、接触・融合を図る垣内の思考態度が読み取れる。こうした西洋思想と東洋思想の接触・融合という思考態度は、垣内学説の随所に見られる本質的な学的傾向と言える。

4 「統一」概念の問題

4-1 「統一」の原語

高森邦明は次のような指摘をしている。

『国語の力』も(中略)統一という概念にこだわっている気がするんですけど。これはどこから来ているんでしょうかね。⁽³³⁾

実際、垣内松三の著作を読むと、「統一」という言葉が極めて多用されていることに気づく。

輿水実「国語教育の統一概念の提示」という項目の中で、「「形象」という考え方が、当初、「文学形象」という形であったことは、その受け入れを容易にした。当時はちょうど、読み方の中から、社会科教材や理科教材などが独立して、それぞれの教科が出来ようとする時代、国語科教育が国文教育として確立されようとする時代であった。説明的文章が国語教育の主教材でなく、文学教材が主教材になろうとする時代であった。／そういう時代だから、形式主義・内容主義の統一が可能になったというか、必要になったというか、形象という統一概念を受け

入れる地盤ができていた。」⁽³⁴⁾と論じている。このように、「統一」概念は初期の形象理論を解き明かすうえで重要なキーワードなのである。

しかし、垣内松三の多用する「統一」という言葉の出典について、これまで、詳細に探求されることはなかった。

石井庄司は次のように述懐している。

大正12年の4月になって、級友の天野博治君が、日本橋の白木屋にモルトンが数冊来ていることを知らせてくれた。早速それを買求め、数人の同級生を語らって、垣内先生に読んで頂くように頼みに行った。(中略)これまで垣内先生がよく引用されたのは、第1編の文学形態学であったが、この時は、第4編の文学批評論 *Literary Criticism* からはじめられた。そして、「この第4編と序論とを続きにして、Unity 統一、Induction 帰納、Evolution 展開を述べて、重要なところである」というのが最初のお話であった。(目次のページの書き込み)⁽³⁵⁾

ここから、形象理論の基本理念である「統一」は、垣内が当時強く関心を示していた Moulton, R. G. の『文学の近代的研究』(*The Modern Study of Literature*)からの援用だったことがわかる。垣内学説が Moulton の影響を受けていることは旧聞に属する。しかし、それは主に『文学の近代的研究』の第1編‘*Literary Morphology*’ (文学形態論)からの影響関係の指摘であった。それに対して、この「統一」(Unity)の考え方は、序論および第4編からの影響によるものなのである。

4-2 ‘unity’ から見た影響関係

遺漏を恐れるのであるが、『文学の近代的研究』の序論および第4編の文章中に、‘unity’ という単語が何回出てくるかを数えた。計14回使われている。同書は後に本多顕彰によって日本語訳される。本多翻訳書においても、‘unity’ は「統一」と訳されている。

‘unity’ は序論の最初のページから出てくる。本多翻訳に拠る。

私の考へるところでは、文学の研究が近代思想の一般精神に遅れた三つの根本的な点がある。

そのうちの第一は、すべての文学の統一(unity)を認識しないことである。⁽³⁶⁾

また、第4編の最後の方にも次のように書かれて

いる。

もし我々が、すべての文学の統一(unity)を、全体との関係におけるその役割を見ることが出来るほどまでに、理解するならば、我々は文学との親密な接触に最も好都合な立場にあるのである。⁽³⁷⁾

従来の、書誌学的・文献学的分類を重視する文学研究を批判し、すべての文学の統一的把握を志向した主張である。この‘unity’は、「近代的研究における最も有力な考え方」⁽³⁸⁾であると自負している。

Moulton の言う「統一」は、文学本質論の上での思考方針を指している。それに対して、垣内の言う「統一」は、自らの学問に対する姿勢を示した概念と言える。後に垣内は、自らの学問を、「国民言語文化体系」「日本文学理論体系」「国語教育科学体系」⁽³⁹⁾の三つに体系づけ、それらを形象理論のもとで統合的に関係づけようと試みた。そうした垣内の学問に対する姿勢を象徴的に表した言葉が、「統一」であったと言えよう。つまり、垣内は Moulton の言葉を借りることで、自らの研究姿勢をより明確に表明し得たのである。

垣内が Moulton から受けた影響は、一般には文学(教材)研究論の分野であると考えられている。しかし、第4編中の‘unity’のうち、次のような記述があった。

我々が取扱ひつつあるところのことは、心理的精緻ではなく、文学の研究において大きな実際的重要性のある問題である。何となれば、或る詩を一度ならず何度も読むことが、その詩が芸術的全体として掴まれる前に必要であるかも知れないからである。成る程、第一読で、諸要素が統合して統一(unity)となつてしまふであらう。けれども、もし——馴染がないか、その他の理由で——成分のうち或るものが注意を惹きつけなかつたならば、その結果として起る印象は、真の印象とは別種のものであるかも知れない。(傍線引用者)⁽⁴⁰⁾

ここで Moulton は、一種の読解過程論を述べている。それは、本稿前章でも扱った「直観・自証・証自証」に代表される複数回の読みを示唆している。垣内が Moulton から受けた影響の範囲は、従来考えられている以上に広いものであったことが推察できる。

複数回の読みの過程は、後の解釈学的国語教育論

等による論理の補強によって、三回の過程へと定着していく。しかし、この「三」という思考は、垣内の研究に既に色濃く認められる。輿水実は次のように述べる。

先生の術語は大抵三対になっている。それは一、二、三と順に深化して行く三であり、一、二の対立を綜合する三であり、稀には一と二の中点に三が置かれることがある。いずれにしても、単なる枚挙でなく、秩序の意図が明かである。思い出すままに拾って見よう。

形式 内容 形象 (『国語の力』に見える)
形式 形態 形象 (『批判と内省』)
直観 自証 証自証 (々) (以下略) (41)

では、三回の読みの過程は垣内の独創かといえ、必ずしもそうとは言いきれない。Moulton の『文学の近代的研究』の中に次のような記述がある。

次に掲げるのは俗諺ではあるが、深い智慧に満ちたものである。即ち——我々は、

「或る一冊の書物を三度読まなければならない——第一回目は、そのすべては何について書かれてあるかを理解する為。第二回目は、それが何を云つてあるかを知る為。第三回目は、友情的敵意の態度をもつて。」 (42)

ここに三回の読みが明言されている。この俗諺の出所について Moulton は次のように注記している。

故アンドリュー・クラーク (Andrew Clarke) 医師が私におっしゃったことを引用した。 (43)

Clarke という人物が言った言葉であることがわかる。しかし、この言葉は Clarke 個人の見解ではなくて、むしろ人口に膾炙した俗諺だった。アメリカの文化風土が醸成した読みの過程であったと考えてよい。垣内が『文学の近代的研究』中のこの部分の記述を意識したかどうかはわからないが、間接的にはあれ、アメリカの読み方教育の文化が伝播された一面であると指摘できる。

5 まとめ

第一のセンテンスメソッドの問題については、従来、わが国では、欧米諸国において、ワードメソッドからセンテンスメソッドへと転換が図られたととられていた。しかし、Huey の図書を丹念に読むと、むしろ、ワードメソッドは Huey の時代も主流であり、それを補完するものとしてセンテンスメソッドが扱われていたことがわかった。また、センテンス

メソッドの実践的創始者についても、日本ではほとんど知られていなかったが、アメリカの Farnham という教師によって開発された方法であることがわかった。

Farnham のセンテンスメソッドには、全体を読むという思想と、一文単位を読み込みの基本とする主張が共存していた。Farnham の著書の全体が翻訳・翻案等で直接日本に紹介されることはなかった。それにもかかわらず、日本のセンテンスメソッドにおいても、こうした二つの見方が並存することとなった。

第二の「直観・自証・証自証」については、二つの文化理論を結合させた産物であることが分かった。「直観」は Croce の美学に由来し、「自証」「証自証」は、大乘仏教瑜伽行派の唯識思想に由来している。そこからは、サブジェクトとしての読者の主体的読みを出発点として、それに確証を与えていく作用を構想しようとする意図が指摘できた。

第三に、垣内が多用する「統一」の出典を明らかにした。それは Moulton の著作中の 'unity' から出ている言葉であることがわかった。垣内が Moulton から受けた影響については、従来指摘されている以上に、その範囲は広がった。文学本質論のみならず、読解過程論にまで、その影響が認められた。三回の読みの過程というの、その原型が Moulton の著書中に登場している。そこにはアメリカの読み方教育の風土が色濃く反映していた。

湊吉正は、「文化科学の溶鉱炉としての『国語の力』』という論文を発表している。その中には次のような表現がある。

たしかに、『国語の力』の中の随所に、自分自身の文化科学的構想の中へ関係するあらゆるものを溶かし込んでいく溶鉱炉のエネルギーを得ることができる。 (44)

本稿では、この溶鉱炉の中に溶かし込まれた多数の文化物のうち、わずか三点を解き明かしたにすぎない。しかし今後とも、その溶鉱炉に溶かし込まれた文化物の少しずつでも解明する作業を続けたい。その結果として、近代国語教育の成り立ちの根拠を知ることができるからである。

【注】

- (1) 輿水実 (1977) 「垣内松三の人と業績」 (『垣内松三著作集第一巻』光村図書、p. 556.)
- (2) Barnes, A. J. (1906) *Barnes' Shorthand Lessons*

by the Sentence Method. St Louis: The Arthur J. Barnes Pub. Co., p. iii.

- (3) 垣内松三 (1927) 『国語教授の批判と内省』不老閣書房、p. 13.
- (4) 垣内松三 (1922) 『国語の力』不老閣書房、p. 2.
- (5) Huey, E. B. (1915) *The Psychology and Pedagogy of Reading*: New York. Macmillan, p. 272. (訳にあたっては、木下一雄訳 (1927) 『ヒュエイ読方の心理学』(日東書院) を参考にした。以下同じ。)
- (6) Huey, E. B. (1915) p. 272.
- (7) Huey, E. B. (1915) p. 273.
- (8) Huey, E. B. (1915) p. 274.
- (9) Huey, E. B. (1915) p. 274.
- (10) Huey, E. B. (1915) pp. 272—273.
- (11) Farnham, G. L. (1887, 2 ed) *The Sentence Method of Teaching Reading, Writing, and Spelling: A Manual for Teachers*. New York: C.W.Bardeen Publisher, pp. 19—20.
- (12) 垣内松三 (1926) 「センテンス・メソッドの弊害 (上)」(『国文教育』4 卷5 号、不老閣書房、p. 1.)
- (13) 塚田泰彦 (2001) 『語彙力と読書——マッピングが生きる読みの世界——』東洋館出版社、p. 59.
- (14) 垣内松三 (1922) p. 19.
- (15) 垣内松三 (1922) p. 19.
- (16) 沖山光 (1973) 『形象理論と構造学習論』明治図書、p. 104.
- (17) 高森邦明 (1979) 『近代国語教育史』鳩の森書房、p. 238.
- (18) 多田サイ「垣内先生の夏期講習会の思い出」(垣内松三講述・石井庄司筆録校訂 (1976) 『垣内松三 国文学史——形象理論の原点——』教育出版、p. 293.)
- (19) 松田徳一郎監修 (1984) 『リーダーズ英和辞典』研究社、p. 1146.
- (20) 垣内松三・石井庄司 (1976) p. 193.
- (21) ベネヂット・クローチエ著・長谷川誠也・大槻憲二訳 (1930) 『世界大思想全集46 美学』春秋社、p. 10.
- (22) 石井庄司「垣内学説の成立過程」(垣内松三・石井庄司 (1976) p. 266.)
- (23) 垣内松三・石井庄司 (1976) p. 71.

- (24) 垣内松三・石井庄司 (1976) p. 71.
- (25) 梶川乾堂 (1909) 『唯識論大綱』鴻盟社、p. 1.
- (26) 横山紘一 (2002) 『やさしい唯識——心の秘密を解く——』日本放送出版協会、p. 10.
- (27) 中村元他編 (2002) 『岩波仏教辞典第二版』岩波書店、p. 1019.
- (28) 松久保秀胤 (2001) 『唯識初歩——心を見つめる仏教の智恵——』鈴木出版、p. 141.
- (29) 多川俊映 (2001) 『はじめての唯識』春秋社、p. 14.
- (30) 横山紘一 (1976) 『唯識思想入門』第三文明社、p. 148.
- (31) 梶川乾堂 (1909) pp. 51—52.
- (32) 垣内松三 (1926) 「白路」(東京高師『校友会誌』)(垣内松三 (1954) 『笹の庭』光村図書、p. 263.)
- (33) 『国語の力』の会 (2001) 『『国語の力』を読む』 p. 45.
- (34) 輿水実 (1972) 『垣内松三』明治図書、p. 36.
- (35) 石井庄司 (1976) p. 285.
- (36) 本多顕彰 (1932) 『文学の近代的研究』岩波書店、p. 2. (Moulton, R. G. (1915) *The Modern Study of Literature*. Chicago: The University of Chicago Press, p. 3.)
- (37) 本多顕彰 (1932) p. 379. (Moulton, R. G. (1915) pp. 331—332.)
- (38) Moulton, R. G. (1915) p. 529. (この部分は本多翻訳書には掲載されていないので、拙訳に拠った。)
- (39) 垣内松三 (1938) 『形象論序説』不老閣書房、巻末「垣内教授著述目録」
- (40) 本多顕彰 (1932) pp. 271—272. (Moulton, R. G. (1915) p. 239.)
- (41) 輿水実 (1972) pp. 147—148.
- (42) 本多顕彰 (1932) p. 306. (Moulton, R. G. (1915) p. 269.)
- (43) Moulton, R. G. (1915) p. 269. (この注記は本多翻訳書には掲載されていないので、拙訳に拠った。)
- (44) 湊吉正「文化科学の溶鉱炉としての『国語の力』」(国語教育研究所編 (1982) 『教育科学国語教育臨時増刊 『国語の力』をこう読む』明治図書、p. 62.)

(岐阜大学)

2004. 8. 1 発送